カーキいろの風景

―原作者　市川信夫さんと映画『ふみ子の海』と―

上越市　吉越泰雄

映画『ふみ子の海』の原作者、市川信夫さんに会ったのはいつころであったろう――と試写会の映画館で思い出した。どす黒く手垢の汚れをそのままにした木の柱や板壁、採光の余り取れてない薄暗い映画館と、出会いの場となった婦人会館を重ね合わせていた。

ぼくは当時二十代、それも前半のような気がする。高田文化協会の会があってぼくは雛壇にのせられていた。雛壇というのは大げさかもしれないが、正面にしつらえられている会長、副会長席の端っこに席が与えられていただけなのだ。協会十周年の行事で懸賞金をつけて募った小説賞が運よくぼくに転がり込んだ。その作品はもう一つ、新潟県レベルの賞も受けた。その二重の受賞も珍しいというのか、若造の癖に招待されて雛壇を汚し、それも今では絶対に与えられないであろう雅子皇太子妃のお祖父さんにあたる小和田毅夫先生の横に座らせられたのだ。

「君は何年卒だね。僕が校長をやっていたときじゃないよね」

先生は、徳利をぼくの盃に傾けながら問いかける。婦人会館の二階の大広間の電球はやけに暗く感じられた。先生が校長を辞められてから、そのすぐ後で入ったことを申し上げると、張りのある声で、「頑張りなさい」といったきり今度は見向きもしなくなった。

ぼくは空の杯を持て余していた。助け舟を出してくれたのが俳人春山他石の娘婿の春山薫さんであった。ぼくに酌をしながら、

「ここは、息が詰まって酒も不味いのではないか。若い者は若い者同士……」

こっちに来なさいという。ひょこひょこついていくと、柱を背に片膝を立てた男がいて、胡散臭げにぼくに一瞥をくれた。陽気な薫さんに対して目を見ないで喋る男にちょっと威圧を感じた。その時紹介されたのが市川信夫さんであった。

「君はどういう考えであの作品を書いたのかね」

フンフン、という自分自身を納得させるような会話の相槌は今も変わりない。ぼくは、「書きたいから書いていて、それが作品に繋がった」とでもいいたかったが、そんな生意気なことをいってはすぐさま反論が飛び出してくるような雰囲気であった。だから、受賞後の報道機関のインタビューで作った、

「解放〝ですかね。自分自身を解放すれば無になってそこから出発できますからね」

というのをそのまま言葉に乗せて答えた。

「まあ、ともかく作品を我われは書かなくちゃあ、どうにもならんのさ」

仰るとおりである。ぼくはその時から怠けに怠け続けているが、市川信夫さんは、『ふみ子の海』を書いてそれが映像となった。

ぼくは試写を見つつづく思った。

こりゃ楽屋落ちの多い作品だのう……と。

しかるゆえに楽屋裏を知っている者にとってこれほど興味尽きぬものはない。よくよく高田が出てくる作品として好感を持ったのだ。

例えば、お医者さんを演じる松川太賀雄先輩――。日頃の斜に構えている勢いは何処へやら、真剣に『御臨終です』とひとこと名セリフを吐き名演技で応える。芸者買いでとてちを着てのさばっているぶー横丁の社長など腹の底から笑いが飛び出るほど適役であった。

料亭うきよの前の改造道路、寺町に抜ける道を土盛りして芸者を歩かせるシーンなども、何時やったのかと感心して観た。まだまだ、高田の協力は画面上でつきない。

以後、「あんた、私が出たの観てなかったでしょう」というのに何回出くわしたことか。

観客席も見ものであった。

ふと、前を見ると恰幅のいい紳士が涙を拭うハンカチを持っていた。感動的なラストシーン。明るくなった場内で、その紳士は目の赤くなっているのを隠しもしなかった。ぼく自身も映画の主役、ふみ

旧小柳医院　松川太賀雄さんエキストラ出演

子のモデル、粟津キヨさんのしゃんと背筋を伸ばした姿を思い出しながら、久しぶりに内から湧き出るものをこらえるのに夢中になっている自分を眺めた。

粟津さんとも長い付き合いであった。といっても、ぼくは心身障害者を取りまとめていた団体の事務手伝いに過ぎない。粟津さんはその副会長である。雲の上の人であった。粟津さんは幹事会でもよく発言した。

いつも正論で、皆は納得せざるを得なかった。しかし、その発言は要求ばかりで自分の障害の域を出ないと、後で必ず批判が出た。

「おまんただって、そうだねかね」

そんな時いつもいさめるのが当時会長をしていた上越市議会議長の廣瀬光雄岳父である。

今はもう、ふたりともどこにいるのか分からない。

（『文芸たかだ』編集長
たかだ越書林代表）

大島区菖蒲　飯田邸

旧今井染物屋

上下浜

旧今井染物屋